

[課程―2]

審査の結果の要旨

氏名 坂口 賀基

本研究では第一に食道上皮性腫瘍に対する内視鏡切除後の狭窄予防法としてのポリグリコール酸シートとフィブリン糊による被覆法の有用性を明らかにすること、また第二に内視鏡切除後狭窄の発症および予防の機序を明らかにすることを目的とした。これらを明らかにするため、ヒトを対象として内視鏡切除後に「ポリグリコール酸シートとフィブリン糊による被覆法」を用いる前向き探索的臨床研究を行い、さらに生体ブタを用いた食道内視鏡切除後狭窄モデルの経時的組織学的評価を試み、下記の結果を得ている。

1. ヒトを対照とした前向き探索的臨床研究として、倫理委員会承認後、臨床研究登録後に3/4周以上に及ぶ食道内視鏡的粘膜下層剥離術後に「ポリグリコール酸シートとフィブリン糊による被覆法」を行った。本研究の対象となった介入群と、当院におけるHistorical control群との比較を行うことにより、本手法の有効性と安全性を示した。
2. 生体ブタを対象に、食道内視鏡的粘膜下層剥離術後に「ポリグリコール酸シートとフィブリン糊による被覆法」を用い、経時的変化を病理組織学的に評価した。その結果、切除部位の筋線維芽細胞定量が狭窄進行の速度と正に相関していることを示し、今まで食道狭窄との明確な関連が示されていなかった筋線維芽細胞が狭窄に強く関与している可能性を見出した。
3. ヒトを対象とした前向き探索的臨床研究として、IRB承認後、臨床研究登録後に3/4周以上に及ぶ食道内視鏡的粘膜下層剥離術後に「ステロイド局注法」及び「PGAシートとフィブリン糊による被覆法」を併用した。本研究の対象となった介入群と、当院におけるHistorical control群との比較を行うことにより、それぞれ単独より高い有効性を示した。

以上、本論文は前向き探索的臨床研究により、食道内視鏡的粘膜下層剥離術後に「ポリグリコール酸シートとフィブリン糊による被覆法」を用いることの狭窄予防効果を初めて示し、さらにこの手法と「ステロイド局注法」を併用することによりさらに高い狭窄予防効果が得られることも初めて示した。さらに生体ブタを用いた動物モデルにより、これまで未知に等しかった食道内視鏡切除後の狭窄発症機序の解明に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。